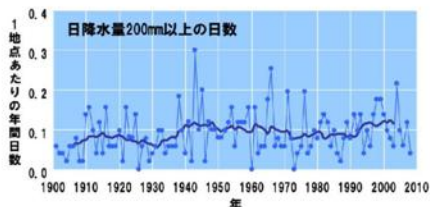
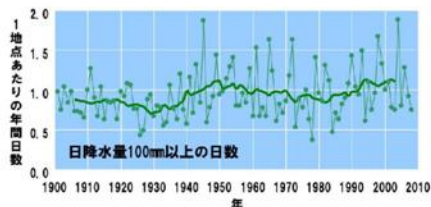


温暖化に伴う大雨の増加とその影響

気象庁によると、我が国では過去100年において、土砂崩れなどの災害につながる可能性のある、日降水量100mmあるいは200mm以上の大雨の発生は増加傾向にあります。このような大雨の増加には、海水温や気温の上昇による水蒸気量の増加が関係しているといわれています。



日降水量100mm以上(左)および200mm以上(右)の年間日数の経年変化
国内51地点の出現日数から求めた1地点あたりの年間日数。細線は年々の値を、太線は11年異動平均値を示す(気象庁 2009より)

■河川からの濁水の流入

大雨が降ると川の水が濁ります。濁りは通常1～2日で収まりますが、ダムに濁水がたまると、濁りが長期間にわたることがあります。

■土砂災害

大雨が降ると、山の斜面がくずれたり、川が氾濫したりして、海に多量の土砂が流れ込むことがあります。



▲高知県内の主なダムの分布



▲高知県西南豪雨災害の様子(平成13年9月)

上流で山崩れが発生し多量の土砂が海に流れ込んだ(左)泥に埋まった海底(右)



■海の環境や生き物への影響

土砂災害により大量の泥土が海へ流入し、海底に堆積すると、サンゴや海藻は泥に埋まって死んでしまいます。また、海水の濁りが長く続くと、太陽の光が十分に届かなかったり、体に降り積もる泥の影響が出るため、サンゴや海藻は光合成に

よって充分な栄養を作ることができなくなります。全ての動物は植物による光合成で作られた栄養をもとに暮らしていますから、このような海で生きていける動物は限られており、生き物の豊かさは失われます。

泥土の堆積による影響 ▶

泥に埋まって死んだサンゴ(左)と濁りの影響で死滅したサンゴ(中央)、サンゴも海藻もいない海には動物の姿がとて少ない(右)

